

この本のいと

この本は、記録集「阪神淡路大震災・看護婦の活動と体験の記録」から内容の一部を抜き出して、小学生の高学年から中学生向けにまとめたものです。「阪神淡路大震災・看護婦の活動と体験の記録」は、平成七年一月十七日午前五時四六分、阪神淡路地方をマグニチュード7.2の地震がおそった直後からガス、水道、電気が回復するまでの、神戸大学医学部附属病院の看護婦達の活動や体験をつづった本です。

地震がおこった時、病院には、六八三人の患者さんが入院していました。また、地震がおこってから約十分後には、地震で、けがをした人々がたくさん大病院の救急外来に運ばれてきました。看護婦達は寝る間もおしんで、医師や薬剤師、放射線技師、検査技師、事務員、栄養士、調理師の人々と協力して、入院中の患者さんや救急外来に運ばれた被災者の看護を行いました。

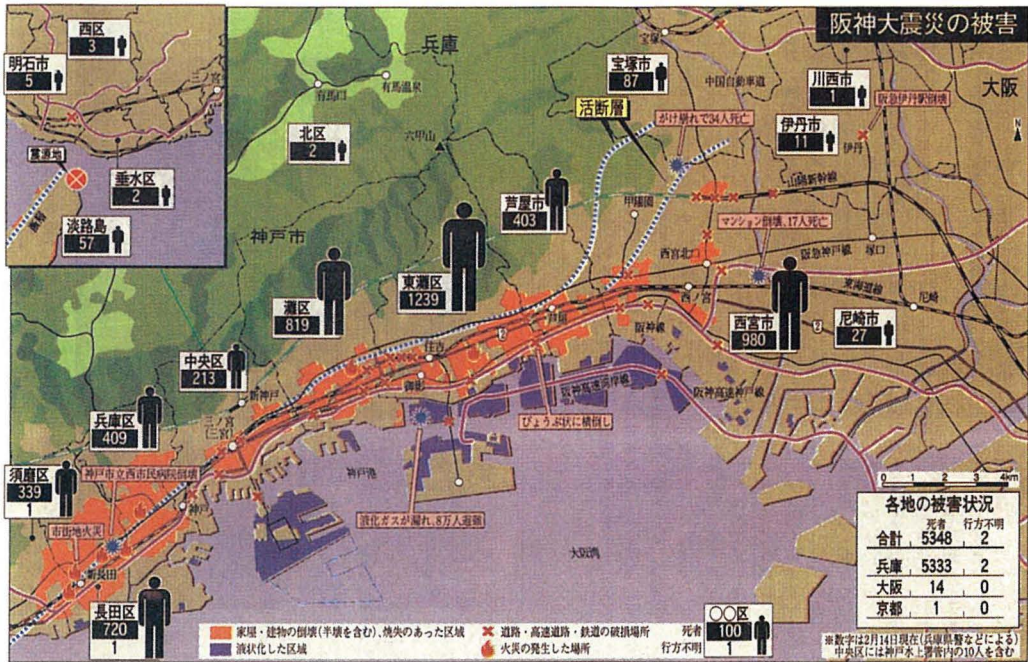
神戸大学医学部附属病院の看護部では、今回の震災での被災者として、あるいは被災者の看護をした看護婦として、体験したこと、感じたことを、まとめて記録集を作することを計画し、平成八年十月に「阪神淡路大震災・看護婦の活動と体験の記録」という一冊の本を完成させました。その本には、震災時、病院の中での看護婦の仕事の内容と二八五人の看護婦の個人的な体験をまとめてあります。

阪神淡路大震災は死者六、三九四人（平成八年十二月二十六日現在の数字）家屋の倒壊・消失二十四万七千戸、ガス・水道・電気など、高速道路や一般道路、線路などがぶたぶたにこわされるという大

な被害を残しました。それによって、多くの人々が困難な生活やつらい気持ちを経験しました。家を失った約三十万人の人々は、避難所から仮設住宅に移り住みました。被災地である神戸市、芦屋市、西宮市、宝塚市、淡路島、大阪市などに、仮設住宅は計四万八千戸作られました。

神戸大学医学部附属病院は、難しい病人の治療、医学の研究や医師・看護婦・保健婦・助産婦・臨床検査技師・理学療法士・作業療法士などの医療従事者の教育を行うことを目的にたてられた病院です。神戸大学病院には、九二〇人の患者さんが入院できるベットと、一日平均一五〇〇人の患者さんが診察を受けることの出来る設備や職員が整っています。働いている職員の数は、医師、看護婦やその他薬剤師、事務員などで、約一、二〇〇人です。

神戸大学病院は、神戸市のほぼ中央の、比較的



地盤の安定したところに建っています。激震地区に近かったのですが、建物が倒れることはありませんでした。しかし、建物の内側や外側の壁に大きなひびが入り、柱の一部がこわれ、水道管やガス管、暖房機などや治療に使う機械がたくさんこわれるという大きな被害を受けました。

神戸大学病院で働いている職員のなかにも震災の被害を受けた人がありました。亡くなった人が一人、けがをした人が十人で、家や家財の三分の一以上を失った人は、三七九人でした。



神戸大学医学部附属病院とその周辺